

「最後の愛餐」

ヨハネの福音書 13:1~30

はじめに

レオナルド・ダ・ヴィンチの名画「最期の晩餐」のモデルとして知られる出来事が、ここから始まります。それはいよいよイエシュアが十字架にかかれる、その前日にあたり、またイスラエルの三大例祭の一つである「過ぎ越しの祭り」を祝う食事の席でもあります。もう何度もお伝えしていることですが、イエシュアの言動、行動、その一挙手一投足には、すべて隠された意味があり、重要なメッセージが秘められています。そしてそれらはすべて神様のご計画を表すものであり、すなわち神様の国、御国を指し示しています。「神の国とその義とをまず第一に求めなさい」と言われたイエシュアの言葉に従いつつ、読み進んでまいりましょう。

13:1 さて、過越の祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された。

冒頭に二つの重要な事柄が、イエシュアがここに表そうとしておられることのテーマ、土台のように記されています。すなわち

①世を去って父のみもとに行くべき時が来た

②世にいる自分のものに、愛を残るところなく示された

ということです。つまりここに展開される出来事は、この二つの事柄に則した形で理解する必要があると考えられます。

1. イエシュアの行動

13:2 夕食の間のことであった。悪魔はすでにシモンの子イスカリオテ・ユダの心に、イエスを売ろうとする思いを入れていたが、

13:3 イエスは、父が万物を自分の手に渡されたことと、ご自分が神から出て神に行くことを知られ、悪魔がイスカリオテ・ユダの心にイエシュアを裏切る、イエシュアを引き渡す考えを入れたことが記されていますが、イエシュアは御父から「万物を自分の手に渡された」とあるように、悪魔の計画をすべて把握しておられることが示されています。そればかりでなく、「悪魔はすでに…ユダの心に」とあるように、もう随分前からユダに裏切らせる計画を持っていたようです。しかしそれを実行に移すことができませんでした。なぜならイエシュアが「万物を自分の手に」握っておられるからです。つまり悪魔はイエシュアの許しなくして何もすることができないということです。そして「ご自分が…神に行く」ため、すなわち十字架にかかれ死ぬために悪魔の計画を逆に利用されることがここに示されていると考えられます。

13:4 夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。

このイエシュアの行為に記されている、…席から「立ち上がる」、…上着を「脱ぐ」、…腰に「まとう」という三つの動詞の中に、イエシュアが「ご自分が神から出て…」ということが型として示されています。すなわち

神様のご計画を成し遂げるために、神様とともに座しておられた所から「立ち上がり」、その神としての位を「脱ぎ」、人の身体を「まとわ」れた、ということだと考えられます。だとすれば、次にイエシュアがなされる行為は、「…神に行く」、御父のもとに帰ることを示したものであるはずです。

13:5 それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまっとうられる手ぬぐいで、ふき始められた。

この「足を洗う」という行為が、聖書で初めて記されている出来事が創世記 18:1 にあります。

創世記

18:1 主はマムレの檜の木の下で、アブラハムに現れた。彼は日の暑いころ、天幕の入口にすわっていた。

18:2 彼が目を上げて見ると、三人の人が彼に向かって立っていた。彼は、見るなり、彼らを迎えるために天幕の入口から走って行き、地にひれ伏して礼をした。

18:3 そして言った。「ご主人。お気に召すなら、どうか、あなたのしもべのところを素通りなさらないでください。

18:4 少しばかりの水を持って来させますから、あなたがたの足を洗い、この木の下でお休みください。

18:5 私は少し食べ物を持ってまいります。それで元気を取り戻してください。それから、旅を続けられるように。せつかく、あなたがたのしもべのところをお通りになるのですから。」

これは主が肉体を持って二人の御使いとともにアブラハムのもとを訪れた時の出来事で、ここで初めて「足を洗う」という行為が記されています。このように「足を洗う」とは迎え入れる、歓迎するという意味であると理解できます。そしてそればかりでなく、この箇所には先ほど述べた「…神に行く」、御父のもとに帰るイエシュアの様子が、型として描かれていると考えられます。それはどういうことかと言いますと、まずマムレ(מַמְרֵ)という名前の中にマーレー(מָרֵי)という言葉を見つけることができます。これは「主」という意味で当然神様を指す言葉です。

ダニエル

2:47 王はダニエルに答えて言った。「あなたがこの秘密をあらわすことができたからには、まことにあなたの神は、神々の神、王たちの主、また秘密をあらわす方だ。」

つまりマムレの木のそばにいたアブラハムとは、「主のみそばにいるアブラハム」を表していると考えられます。イエシュアが公生涯として地上を歩まれた時には、すでにアブラハムは死んでそこにはいませんでした。つまり「主のみそばにいるアブラハム」とは、地上ではなく天上のことを指していると考えられます。そこにやって来た三人のうちの一人がイエシュアだというわけですが、他の二人についても説明がつきます。使徒の働き 1 章でイエシュアが天に上げられる時、すなわち御父のみもとに行く時に、この二人の御使いが登場しています。

使徒の働き

1:9 こう言うてから、イエスは彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなられた。

1:10 イエスが上って行かれるとき、弟子たちは天を見つめていた。すると、見よ、白い衣を着た人がふたり、彼らのそばに立っていた。

地上での受難の旅を終えたイエシュアは「足を洗う」、すなわち喜び迎えられたのです。このように、「席を立ち上がり」、上着を「脱ぎ」、腰に「まとう」、そして「足を洗う」という行為の中に、イエシュアが「ご自分が神から出て神に行くこと」が型として表されていると考えられます。

しかし先ほどの創世記 18:5 でアブラハムが主に向かって「旅を続けられるように」と言ったように、イエシュアの天上での滞在が一時的なものであることも示されていると考えられます。なぜならイエシュアは再び地上に戻られる、再臨されるからです。

その「旅の続き」であるイエシュアの地上再臨の、その目的についてもこの創世記 18 章の「足を洗う」ことから始まる一連の出来事の中に示されています

創世記

18:17 主はこう考えられた。「わたしがしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。」

18:18 アブラハムは必ず大いなる強い国民となり、地のすべての国々は、彼によって祝福される。

18:19 わたしが彼を選び出したのは、彼がその子らと、彼の後の家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公正を行わせるため、主が、アブラハムについて約束したことを、彼の上に成就するためである。」

「足を洗う」という行為から始まった一連の出来事の中に、このように神様のご計画がはっきりと記されています。つまり「足を洗う」という行為には、神様がアブラハムに対して交わされた契約、神様のご計画を指し示し、想起させる目的もあると考えられます。主はこの時、アブラハムにイサクの誕生について告げ、アブラハムとその子孫によってそのご計画が成し遂げられることをも示されました。そしてまたそれに引き続いて以下のことにも言及されます。

創世記

18:20 そこで主は仰せられた。「ソドムとゴモラの叫びは非常に大きく、また彼らの罪はきわめて重い。」

天からの火と硫黄によって滅ぼされた町、ソドムとゴモラ。このように神様のご計画は、アブラハムとその子孫を選び出すだけでなく、同時に罪人を裁くということをも指し示していると考えられます。神様のご計画は、それを「喜び迎える」者にも、そうでない者に対しても表されるものです。ですから、イエシュアはこの「足を洗う」という行為を、弟子たちだけでなく、裏切る者であるイスカリオテ・ユダにもなされたと考えられます。これらのことが「足を洗い」、そして「旅を続けられた」主によってなされる、すなわちイエシュアが「この世を去って父のみもとに行く」ことと、「地上に再臨される」ことによって成し遂げられる創世記 18:17 の隠されている「わたしがしようとしていること」、すなわち神様のご計画だということが示されていると考えられます。

13:6 こうして、イエスはシモン・ペテロのところに来られた。ペテロはイエスに言った。「主よ。あなたが、

私の足を洗ってくださるのですか。」

13:7 イエスは答えて言われた。「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」

「わたしがしていること」という表現が先ほどの創世記 18:17「わたしがしようとしていること」と結びつきます。すなわちこれも神様のご計画を指し示していると考えられます。しかしそれは隠されているので、この時点の弟子たちにはそれを理解することはできません。

13:8 ペテロはイエスに言った。「決して私の足をお洗いにならないでください。」イエスは答えられた。「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。」

「足を洗う」という行為の中に、神様のご計画のすべてが凝縮されて表されているのです。すなわちアブラハムとの契約も、救いも滅びもすべてです。ですからイエシュアは足を洗われることをためらったペテロに対して「足を洗わないと滅びる」とは言われず、「何の関係もない」と言われたのだと考えられます。

13:9 シモン・ペテロは言った。「主よ。私の足だけでなく、手も頭も洗ってください。」

13:10 イエスは彼に言われた。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身きよいのです。あなたがたはきよいのですが、みながそうではありません。」

「足を洗う」ことがイエシュアと自分との「関係」についてのものだとしてペテロは誤解したようです。イエシュアが言われたように今のこのペテロには「わたしがしていることは、今はあなたにはわからない」のです。ですから「足を洗う」ことが正しい「関係」、「きよい関係」についてのものではないということです。

そしてペテロが「手も頭も洗ってください」と言っていますが、イエシュアは「足以外は…必要ない」とまで言われ、あくまでも「足」にだけ注目するように言われています。このイエシュアの「足」に対するこだわりの訳を、ヘブル的に考えてみたいと思います。足はヘブル語でレゲル(לֶגְלָךְ)と言います。これが聖書で最初に使われるのが創世記 8:9 にあります。

創世記

8:9 鳩は、その足^{レゲル}を休める場所が見あたらなかったので、箱舟の彼のもとに帰って来た。水が全地の面にあったからである。彼は手を差し伸べて鳩を捕らえ、箱舟の自分のところに入れた。

これはノアの箱舟の物語の一場面です。一般的に「足」とは、「立つ、歩く」ためのもの、というようなイメージの方が大きいのですが、ヘブル語の「足」レゲルは足を「休める場所」、足のふむ「場所」を指し示しているのです。申命記 11:24 にこのような御言葉があります。

申命記

11:24 あなたがたが足^{レゲル}の裏で踏む所は、ことごとくあなたがたのものとなる。あなたがたの領土は荒野からレバノンまで、あの川、ユーフラテス川から西の海までとなる。

このように、足は「場所」しかも所有地、相続地、領土を意味していると考えられます。「足以外は…必要ない」と言われたイエシュアの真意は、永遠に休むべき場所、安息の地である神様の国「御国」にだけ注目点を置くことを指し示したものであったと考えられます。

またこの創世記 8:9 の出来事そのものが、弟子たちの足を洗われた時のイエシュアの状況、「この世を去って父のみもとに行くべき自分の時」が、型として表されていると考えられます。すなわち、ノアが鳩を放ったように、御父はイエシュアをこの地に遣わされました。そして鳩が足を休める場所を見出せなかったように、イエシュアもご自分の民であるイスラエルから拒絶され、住むべき場所を見つけられませんでした。そしてこの鳩のように、自分を遣わした方のもとに帰られるのです。

ちなみに「足を洗う」の「洗う」は、ラーハツ(לָחַץ)と言い、初めて使われる箇所は、先ほどのアブラハムが主の足を洗った創世記 18:4 です。それは文字通り洗うという意味ですが、それに必要なものがあります。それは水です。一般的に水で洗うとは、水で汚れを落とすことを意味しますが、聖書では水は神様が天地創造をされる前から存在していたものとして記されています。

創世記

1:1 初めに、神が天と地を創造した。

1:2 地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上であり、神の霊が水の上を動いていた。

つまり水で洗うとは、天地創造の前に戻す、リセットする、全く初めからやり直すという意味があると考えられます。足が「足の裏が踏む所」、この地、相続地、所有地を意味していることを先ほど述べました。ですからこのように「足を洗う」とは、この地上をリセットする、全く初めから再創造することを意味しているとも考えられます。

またイエシュアは「足を洗う」だけでなく、腰の手ぬぐいで「足をぬぐい」ました。この「ぬぐう」はヘブル語でマーハー(מָחָה)と言い、「拭い去る」という意味です。これが初めて使われる箇所は創世記 6:7 です。

創世記

6:7 そして主は仰せられた。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜やはうもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを残念に思うからだ。」

これはノアの洪水に際して主が語られた御言葉です。ここで「消し去ろう」と訳されているのがマーハーです。「足を洗う」ことがこの地上を全く初めからやり直すことであるならば、当然かつてのものはすべてマーハー「ぬぐわれる、消し去られ」なければなりません。しかしノアとその箱舟にいたすべてのものたちが生かされたように、救われる者と滅ぼされる者があるのです。ですからこのマーハーは「裁き」をも意味すると考えられます。

以上、これらのことが、イエシュアが弟子たちの足を水で洗い、そして手ぬぐいでぬぐわれたことの真意だと考えられます。

13:11 イエスはご自分を裏切る者を知っておられた。それで、「みながきよいのではない」と言われたのである。

13:12 イエスは、彼らの足を洗い終わり、上着を着けて、再び席に着いて、彼らに言われた。「わたしがあなたがたに何をしたか、わかりますか。」

弟子たちの「足を洗い」終えられたイエシュアが上着を「着けて」再び席に「着く」これも神様のご計画を示す一つの型です。すなわちイエシュアは再び神様の御子としてその王座に着座されるということです。つまり「足を洗う」ことだけでなく、イエシュアが夕食の席に着き、そしてそこから立ち上がられた時から、再び座られるところまでの全ての動きが一つのメッセージであり、神様のご計画を表していると考えられます。

イエシュアの行動	神様のご計画
席から「立ち上がる」	天の御座から下りる
上着を「脱ぐ」	神としての在り方を捨てる
手ぬぐいを腰に「まとう」	人の姿となる
足	地、場所
水で洗う	再創造
ぬぐう	かつてのものを消し去る、裁く
再び上着を「着る」席に「着く」	神様の御子として王座に着く

イエシュアは弟子たちに向かって「わたしが何をしたかわかりますか」と問われました。人はすぐ「自分が何をしなければならぬのか」と問います。しかし私たちイエシュアの弟子たちが問わなければならぬのは「自分が」ではなく、「イエシュアが何をなされ、そして何をなさそうとしておられるのか」ということです。

2. わからなくても

13:13 あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです。

13:14 それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。

13:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。

イエシュアは弟子たちに対しても互いに「足を洗い」合うようにと命じられました。その目的が神様のご計画に目を向けさせ、イエシュアを思い、その再臨を待ち望ませるものであることは明白です。イエシュアご自身がそのことの模範です。

13:16 まことに、まことに、あなたがたに告げます。しもべはその主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさるものではありません。

13:17 あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行うときに、あなたがたは祝福されるのです。

「足を洗い合う」ことの意味は、この時の弟子たちには理解できません。しかしだからと言ってそれを行わないのではなく、主であり師であるイエシュアが示された模範に倣い、聞き従うなら祝福されます。主人がしもべに求められることは、理解することではなく、聞き従うことだからです。

3. 霊の激動

13:18 わたしは、あなたがた全部の者について言っているのではありません。わたしは、わたしが選んだ者を知っています。しかし聖書に『わたしのパンを食べている者が、わたしに向かってかかとを上げた』と書いてあることは成就するのです。

13:19 わたしは、そのことが起こる前に、今あなたがたに話しておきます。そのことが起こったときに、わたしがその人であることをあなたがたが信じるためです。

イエシュアは、裏切る者が元々どのような存在であるかについて、詩篇の一節を用いて語っておられます。

詩篇

41:9 私が信頼し、私のパンを食べた親しい友までが、私にそむいて、かかとを上げた。

イエシュアはご自分を裏切る者に対し「私が信頼し、私のパンを食べた親しい友」と呼びかけておられるのです。そのような存在に、イエシュアは裏切られるのです。家族も同然の親しい友人に裏切られることによる心の痛みはどれほど大きなものでしょうか。ましてやイエシュアは「世にいる自分のものに、愛を残るところなく示された」（口語訳では「最後まで愛し通された。」新共同訳では「この上なく愛し抜かれた。」岩波訳では「極みまで愛した」）御方です。そのような愛の対象に裏切られ、拒絶されるのです。そこには計り知れない苦痛があったと考えられます。聖書はこれを「霊の激動」と表現しています。

13:20 まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしの遣わす者を受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。わたしを受け入れる者は、わたしを遣わした方を受け入れるのです。」

13:21 イエスは、これらのことを話されたとき、霊の激動を感じ、あかしして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ります。」

イエシュアが感じられた「霊の激動」、これをヘブル語でパーアム(פֶּאֱמָ)と言います。これが聖書で最初に使われるのが創世記 41:8 です。

創世記

41:8 朝になって、パロは心が騒ぐので、人をやってエジプトのすべての呪法師とすべての知恵のある者たちを呼び寄せた。パロは彼らに夢のことを話したが、それをパロに解き明かすことのできる者はいなかった。

エジプトの王パロは、自分が見た夢の意味が理解できず、パーアム、心を騒がせたことが記されています。つまりパーアムとは理解できない物事を目の当たりにしたことによる心の動揺を意味すると考えられます。イエシュアはイスカリオテ・ユダがご自分を裏切ることは知っていました。しかしそれがなぜユダなのか、なぜ三年半の間、他の 11 人の弟子たちと同様、ともに歩んできたはずの彼なのか、なぜユダがわたしを裏切るのか！

というような激しい問いかけ、強く投げかけるような思いがイエシュアの心にはあったと思われます。そして「わたしを受け入れる者は、わたしを遣わした方を受け入れる」と言われたように、イエシュアの心は御父の心と一つです。ですからこの「霊の激動」は御父である神様も同様に、ともに感じておられることだということです。ここに神様が決してご自分の計画のために、イスカリオテ・ユダをまるで捨て駒のように悪者に仕立て上げたのではないということが解ります。ユダの心に悪魔を取りつかせたのは、決して決して神様の仕向けられたことではありません。ユダが自分で神様のご計画を、イエシュアを拒み、そして悪魔を受け入れたのです。しかしそれでもイエシュアは、御父である神様は、三年半の間、彼が悔い改めることを願っていたのです。

エゼキエル書

33:11 彼らにこう言え。『わたしは誓って言う。——神である主の御告げ——わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。』

「なぜ、…死のうとするのか」という、その問いかけの表れがイエシュアの感じられたパーアム「霊の激動」であると考えられます。

4. 右と左

13:22 弟子たちは、だれのことを言われたのか、わからずに当惑して、互いに顔を見合わせていた。

13:23 弟子のひとりで、イエスが愛しておられた者が、イエスの右側で席に着いていた。

13:24 そこで、シモン・ペテロが彼に合図をして言った。「だれのことを言っておられるのか、知らせなさい。」

13:25 その弟子は、イエスの右側で席に着いたまま、イエスに言った。「主よ。それはだれですか。」

ここでペテロは自分で直接聞かずに、他の弟子のひとりに合図して質問させています。この弟子は「イエスが愛しておられた者」と記され、イエシュアのすぐ「右側」にいました。聖書においてこの「右側」という表現は最も有力で重要な、近い存在を意味し、イエシュアご自身もまた神様の右に着座される御方です。

マルコ

16:19 主イエスは、彼らにこう話されて後、天に上げられて神の右の座に着かれた。

またこのような御言葉もあります。

マタイ

25:31 人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。

25:32 そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、

25:33 羊を自分の右に、山羊を左に置きます。

25:34 そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。』

25:41 それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ。』

王すなわちイエシュアは、羊と山羊を右と左により分け、右に置かれる者が「備えられた御国を継ぐ」者と指し示しています。一方左にいる者はのろわれた者、イエシュアから「離れて」いく者、すなわちここでのイスカリオテ・ユダがそれにあたります。このように神様のご計画とは右と左を、「御国」と「永遠の火」に入る者とを分ける、裁くことであることがここでも示されていると考えられます。ですからあえてイエシュアの右側にいた「イエスが愛しておられた者」の存在を強調し、その上でそれと対比させる存在としてのイスカリオテ・ユダの存在を「のろわれた者、永遠の火に入る者」すなわち滅びる者として表していると考えられます

5. 悪魔のわざ

13:26 イエスは答えられた。「それはわたしがパン切れを浸して与える者です。」それからイエスは、パン切れを浸し、取って、イスカリオテ・シモンの子ユダにお与えになった。

この描写も一つの型であると考えられます。イエシュアはご自分をパンにたとえておられました。パン切れ、つまり引き裂かれたパンが浸されています。この「浸す」はヘブル語でターヴァル(טָבַל)で、これが聖書で最初に使われるのが創世記 37:31 です。

創世記

37:31 彼らはヨセフの長服を取り、雄やぎをほふって、その血に、その長服を浸した。

このようにターヴァルは殺され、血を流すことを指し示しています。つまりこのイスカリオテ・ユダの裏切りが、イエシュアを死に至らしめるものであることが示されていると考えられます。

13:27 彼がパン切れを受けると、そのとき、サタンが彼に入った。そこで、イエスは彼に言われた。「あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい。」

13:28 席に着いている者で、イエスが何のためにユダにそう言われたのか知っている者は、だれもなかった。

13:29 ユダが金入れを持っていたので、イエスが彼に、「祭りのために入用の物を買え」と言われたのだとか、または、貧しい人々に何か施しをするように言われたのだとか思った者も中にはいた。

弟子たちの目に、神様のしようとしていること、ご計画が隠されているということは、それを阻もうとする悪魔のしようとする、計画もまた、このように理解できません。つまり神様のご計画が理解できなければ、悪魔の策略に立ち向かうことができないばかりか、この時の弟子たちのように、悪魔が働いていることに気づくことさえできずに、かえって騙されてしまうということが示されています。

13:30 ユダは、パン切れを受けるとすぐ、外に出て行った。すでに夜であった。

ユダは一人で出て行ったわけではありません。13:27「サタンが彼に入った」とあるように、サタンとともに出て行ったのです。彼らの行く先は「夜であった」とあります。夜はやみを意味します。

創世記

1:4 神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された。

1:5 神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。

神様のご計画は、光を良しとされ、やみと区別する、分ける、すなわち裁くことです。イエシュアのもとから出て行くサタンとイスカリオテ・ユダをやみに行く者として表すことで、イエシュアとそれに属するものたちを光にたとえ、神様に良しとされる者であることを示しています。

6. 神は愛です

こうしてイスカリオテ・ユダは、サタンとともにイエシュアのもとから去り、外の暗やみの中に消えました。その後彼は、その罪の呵責に耐え切れず、自ら首を吊って死を選びます。しかしその死は、決して神様の望むものではなかったこと、「霊の激動」を覚えるほどのものであったことを見ました。今日の箇所はイエシュアを通してなされる神様のご計画の全体を記しながらも、その随所に裏切る者への言及が記され、神様の目がそこにも注がれていることが解ります。神様は「世にいる自分のものに、愛を残るところなく示された」、つまり

ヨハネ

3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。

世にいるすべての人を愛しておられる、という神様の愛の大きさの表れであり、そのご計画を成し遂げようとする中にも、裏切る者を残念に思う思いと、死ぬと分かっているにもかかわらず、それでもなお「悔い改めて戻って来い！」と呼びかけ、手を指し伸ばすような神様の愛を確かに垣間見ることができ、神様という御方が決してプログラムされたロボットのように、感情、熱い愛情を持っておられるということが解ります。そしてその愛は、自分を裏切り拒絶する者にさえ向けられるものであることに、神様を賛美せずにはいられません。神様のご計画を知ることは確かに重要です。しかし神様の愛を知ることもまた重要です。なぜなら

Iヨハネ

4:8 愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。

エペソ

3:19 人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。